

保育の今と 倉橋惣三の保育法講義録

関口はつ江

一、はじめに

倉橋先生の講義録の一言一言は「本当にそなのだ」と心から納得することができますし、保育の奥行き、その妙味を実感することができます。しかし、それとともに、暴言かもしれません、「ことごとく倉橋理論と逆の方向に進んでいる今の保育の現場をどのように考えたらよいのかとの戸惑いが一層深まります。幼児を愛し、その生活の充実をはかるとの思想に正面から異論を唱える人はないでしょうに、現にそのように努力している園や保育者も多くあるに違いありません。私の所属する附属幼稚園でも保育者は一生懸命精進しているつもりなのでですが、子ども達に十分満たされた活動をさせられずに悩み続けています。この保育の実現のためには文字に現れていないところでの工夫や努力が必要なのだと思いま

何が足りないのか、どこでボタンの掛け違いがあるのかを振り返つてみると、いささかなりとも新たな進展が得られるかもしれないと考えて、考察を試みました。

二、親しむ心とバランス感覚

この講義録の全編を通して、全体を貫いているその精神の中で、私に際立つて特徴的に感じられたのは、何事にも親しい感情をもつて近づき、受け入れている心の持ち方と、一方に偏らず必ず両面から、二方向からまたは表と裏から捉えていくバランスの上に上った発想です。

まず第一に「保育の保育たるところは生活にふれる」とだ。幼児の心を愛すると言つても、その子の生活、衣食住にふれずしては手が届かないものだ」「幼稚園の楽しさは、子どもの自発性に引きずられてゆく楽しさである」のように、保育者は在りのままの子どもを愛することが基本とされ、好嫌、善悪、優劣等の基準を作つてしまわずに、在りのままの世界に近づき、出会い、受け入

れ、自然にかかわることが強調されています。驚くことも大切であるとされていますが、驚くためには防衛的にならず、開かれた状態でなければなりませんし、自分既存のイメージや基準を新たなる経験によつて変えることのできる柔らかさが必要です。

こうした、自分をとりまく世界のあらゆるものに親しみをもつてかかわろうとする心は幼い子ども達が本来のものですが、現代の厳しい環境条件の中で、子ども達はいつまでその気持ちをもち続けることができるでしょうか。

親しみを込めて近づくとき、傷つくことが多ければ、近づく前に弁別し、判断しなければなりません。自分を守るために、人にも物にも心を開いて自分のすべてでかかるに、警戒しながら自分の一部で、あるいは経験によつて確かめられていることに固執しながらかかわらうとする傾向が生じてくるのも当然です。子どもが誤がわからないまま拒否されたり、逆に欲望を搔き立てられたりすることが多ければ、外界に大らかに安心して向かえ

ず、まず構えたり、閉じたりしてしまいます。子ども達にも、若い保育者にもそのような傾向が強くなつて来てることにどう対処したらよいか、を考え込んでしまいます。

第二に倉橋先生の述べ方には二方向からのが多く、偏らず、また全体を、と考えられています。「本当の教育とはその人を全体として教育すべきだが、どうもぼんやりして徹底的にできないから部分的にやるようになつてくる。」「保育されているという意識を感じさせない仕組み」「保母は大勢をまとめるのではなく、揃えるのではなく、いわんや引き離すなどせずに、数人を数人として相互生活させるために、優れたマネージャーでなければならない」など。

保育者は物事を表と裏から見、一方に偏しないゆとりとバランスの感覚が必要となります。その点から現代を見ますと、自然界すらも自然の回復力が弱まり、異常現象が問題になつており、人間も自分の自然の力でほどよい調和を回復することができにくい状況にあり、意図的

人工的な力に頼つて健全な生活を作り出している場合が少くありません。そうした中で、一方に偏らず、特定のこととに頼らずに適度な生活を展開誘導する力をもつ保育者は、よほどその人格の形成過程、保育者としての成長過程において、自発性が受容され、安定した情緒をもち、道徳性や美的感受性、生活習慣などにおいて調和のとれた体験をして、内側に適度なバランス感覚を有していることが求められます。すなわち、教えられたり、決められたりした観念的なものではなく、一方に偏つたとき、自然に逆の方へ戻すことができるその人自身のもつている回復力が大切なのだと思ひます。

ところが、今は特定の能力を高めたり、多くの知識を吸収する必要性のため、多かれ少なかれ、かなり偏つた生活を余儀なくされていますから、保育者にどの程度そうした弾力性があるか疑わしくなるのです。
若い保育者が幼児と一緒に遊ぶ中で、とんでもない（どこちらには思える）ことを幼児と一緒に平氣でしていたり、大声で叱るほどのことではないのに厳しく叱つ

たりなど、明文化した基準や約束がないと保育に手どころが加えられない状況が多いように思えるのです。

倉橋先生の思想を実現するためには、ここに述べられている保育法の原則の前に基盤作りのための原則が加えられる必要があるのでないでしょうか。

三、幼児の変化と保育者

子ども達にもまた、人とのかかわりにせよ物とのかかわりにせよ適度のところで止めることができずに徹底してやってしまう、あるいはあることはどうしてもやらなければならぬ現状です。すなわち、保育者は子どもの行動の一つ一つから、その根底にある内的世界の全体像のおよそが掴めなければなりません。そのためには、個々の現象に惑わされない安定した視点、総合的に捉える力、そして子どもの発達する力への信頼感などが必要とされるでしょう。

さらに、子どもの弱い気持ちや困難な状態に対しても、子どもに選択的に共鳴しながら、幼児の中に起きてくる微妙な変化に敏感に反応しつつ相互作用をすることも大切になります。こうした心の動かし方は保育者自身の経験が大きな力となるものと思われます。

四、保育者の資質

「幼児は自ら、自分を抽象することができない。だから

幼児に対しては全体的に具体的にあるべき……本当の教育とはその人をその人全体として教育すべき……」と、保育は子どもの全体がよく育つようにかかわるわけですか。

(A) Sは「ぼくかけるかな……。でもかいてみる。ズボンをかくつてむずかしいな……。これでいいのかな

」細い線で不安気にかく。「それでいいわね。ど

れ、先生にもかかせてみて、ちょっとはつきりさせて
みるわね。」と同色のクレヨンをもつて線をはつきり
入れると、「そうだ、それでよかつたんだ」と自信が
ついたようだ。

(B) 「つかれた——暑い——」お集まりの最中に我慢が
できず、座りこんだり、ふざけたりするT。「暑いの
はみんなおんなんじ。がんばって」とはげますが、
「だってつかれたんだから——」と頑張りがきかな
い。担任が支えてやつても手をふりほどいて座りこん
でしまう。

(A)においては保育者は何の躊躇もなく子どもの活動に
加わりながら、子どもが自信を得る瞬間を感じとっている
ますが、(B)では子どもを支える力が外から加わっている
だけで、その内側にまで入りこんでいません。こうした
違いは保育の技術や発達についての知識などを超えたよ

り人格的なことがらではないでしょうか。

子どもの発達が周囲との関係、特に親のかかわり方な



どによって、何らかの方向で偏りが強くなっているとするならば、子どもの「生命的」「全体的」な自発性を發揮させるためには、保育者が自意識や効果の意識を除いた真の自発性をもつて子どもとふれ合うことにおいて、

より積極的なかわりの意識をもち、個々の子どもの発達的課題を洞察し、その心に共鳴し、さらに忍耐強く接する成熟した人格と強い意志力が必要とされていると思われます。

五、想像性と現実性——保育項目に関連して——

保育項目についても、両面性で述べられています。例えば製作では人格的活動と神経的な要素に、誘導も芸術的な誘導と産業的誘導に分けています。観察のところでは、「現代の教育においては比較的傾向が養成されすぎる。鑑賞能力を養成したい。保育項目の中でもお話などは鑑賞されるべきものである。……このような鑑賞能力と相まって、比較能力の養成も大切なである。」との言葉があります。談話もまた、話し合い、会話とお話

に分け、さらに各々の中で働く心の作用を二つに分けていきます。しかし、保育項目全体を通して、想像や虚構よりも現実性を重んじて、いることは明らかです。

「作品においては生活の必要から作られたもの……象徴的では役立たぬ。形だけ見掛けだけの作品であつてはならぬ」「目的生活において、初めて人生の意識が生まれる。……幼児にこの生活をさせる場合、目的も計画も生活も具体的であることに価値がある。……目的というものがを中心に動いていく保育こそ有意義」（製作の項目）

「……あの情操本位、芸術教育のほしいままなることのもつところから生ずるとりとめのなさ、あいまいさ、不正確、このようなものの欠陥をその点において補おうとするのが観察を呼んだ原因である」「小鳥を観察するのに、小鳥を大切に思うからではなく、子どものこれらに対する実感的態度養成が目的である……そのものの忠実なる観察なくしては出来ないのである」（観察の項目）

幼児の象徴性や空想性を前提としながら、そこから個人の恣意的な活動や抽象的な知識、部分的な技術などに

走らないよう、生活の裏づけ、「真物」との関連性、実感することを重要視しています。

今の子ども達は実感する前に知識をもつてしまふことの問題がありますから、実物に即すること、具体的であることの重要性は誰もが認めるところです。しかし、実験が貧弱であると同じ位に空想や想像的発想もまた貧弱であるのが今の子ども達ではないでしょうか。子どもは自分のイメージで生活を捉えることができるところから、現実への通路が開かれるのだと思います。子どもが豊かな想像がえがけるような自然や人との出会いのある生活が展開され、空想の世界を楽しめた時代とは異なっています。

子どもには窮屈すぎる時間、空間、生活の枠組みや親の期待などの中にあって、心身が自由に解放されてはいない子ども達が沢山いると思われます。社会自体が能率や効率に向かっている現在、子どもの非現実の世界がまず生存権を得て、その後に現実への対応が子どもの実感として考えられるのではないでしょうか。

倉橋先生は「小鳥を観察するのに、小鳥を大切に思うからではなく」と述べていますが、よく見る心が働くのは、小鳥が好きになる、大切に思う心が底にあるからではないでしょうか。先に指摘しましたように、倉橋先生はいろいろなものが好きであることは当たり前のことはようを感じているのではないかと思うのですが、まず好きな心を育てることや自分の思いを自由に表出し、それが誰かに受け取られて現実性を帯びてくる過程をふむことが先に必要であるように思えるのです。

すなわち、子どもの空想や象徴の世界におとなが入っていくこと、子ども独自の活動でもその意味を認めて、そこから徐々に実際的なものへの誘導することです。

この頃の保育の現場で「使えるものを作る」「食べられるものを作る」「鑑賞に耐えうるような表現活動をする」など、幼児にもこんなに立派なことができる、と誇示する傾向があります。それが、子どもの必要感や目的意識と離れて、保育者に動かされて活動していく、幼児自身のイメージが活動の展開に追いついていない場合も

少なくないようです。たとえ具体的な活動の内容が稚拙であっても、子どもの発想と活動の内容とがよくつながっていることを先にしなければならないと思うのです。もっとも子どもの考えが先行して、実現の方法が適切でない（保育者の援助が適当でない）ために子どもが育てないでいることもありますから、気をつけなければなりませんが。

以上、倉橋先生が前提としているのではないかとみられる基盤をしっかりと作らないと、保育が空転する危険を感じるのです。

その部分ができ上がりますと、今の子ども達は早いスピードで育つて行くのではないでしょうか。刺激、情報、材料は豊富なのですから。保育を構成するに際して、その比重のおき方、進める早さなどは対象児と保育者の特性に合わせて、十分に検討し、確實に育つ方向が明らかに現れるまで、時間はかかるても、忍耐強く取り組む必要だと思います。

倉橋先生が多様な角度から提唱している保育の視点を消化し、位置づけ、組みかえて、今の子ども達の育ちを助ける気概をもちたいと思いました。

この講義録はそうした思いを強くさせる暖かさと強さにあふれた貴重な手引き書に思いました。

（郡山女子大学短期大学部）